CARNA BIOSCIENCES

カルナバイオサイエンス株式会社

株主通信

第16期報告書

2018年1月1日～2018年12月31日

CONTENTS

トップメッセージ …… P01
2018年のTOPICS …… P10
研究室紹介 …… P11
連結財務諸表 …… P13
株式の状況／株主メモ …… P14
会社概要 …… 裏表紙

研究開発体制の強化により、創薬事業を推進
中長期的計画で収益インパクトを生み出す

代表取締役社長
吉野 公一郎

Q1 2018年12月期の大きなトピックスは?

飛躍的成長のための準備の1年になりました

当社は2003年の創業当初から、キナーゼ技術をコアに、アンメット・メディカル・ニーズ(まだ有効な治療法がない疾患に対する医療ニーズ)に応える創薬ベンチャーとなることを目指して研究を続けてきました。

2018年12月期は、まさに飛躍的成長のための準備の1年だったと思います。3月に大日本住友製薬と精神神経疾患領域のキナーゼ阻害剤の創製を目的とした共同研究を開始したのをはじめ、7月には自社で臨床試験を行うために臨床開発部を創設、第3四半期にはシエラ社に導出(ライセンスアウト)したCDC7阻害剤AS-141(シエラ社の開発コード:SRA141)の米国での治験申請が完了しました。2つのBTK阻害剤については欧米での治験申請を目指した前臨床試験を着実に実施し、さらに複数のパイプラインで前臨床試験へのステージアップに向けた研究開発が順調に進んでいます。これまでの努力が一気に開花していく段階に入ったと実感しています。

臨床開発のフェーズⅡaまで自社で実施可能な体制を整えました

当社の創薬事業のビジネスモデルは、自社で創製したブロックバスター(年間売上1,000億円超の新薬)候補となる化合物を大手製薬企業などに導出し、それによってライセンス収入を得るというもの。導出時に「契約一時金」、その後の各段階で「マイルストーン収入」、新薬上市後は売上の決められた割合を「ロイヤリティ収入」として得るという収益モデルです。日・米・欧の主要3極を含むグローバル市場に新薬を送り出すことを目標としているため、特定の国や地域のみでの製品化を前提とする製薬企業への導出はしない方針で導出先を検討しています。

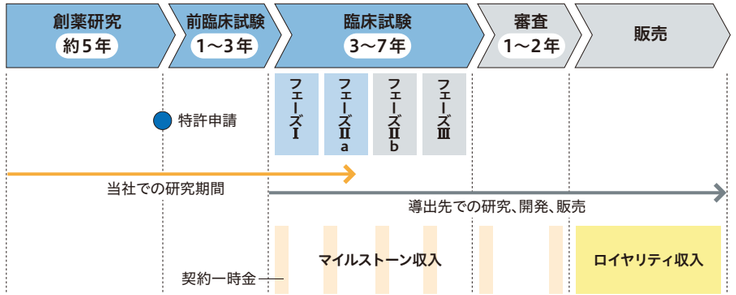
条件が折り合えば、前臨床段階での導出を戦略的に進めますが、基本的には当社が創製した医薬品候補化合物に関するデータをできるだけ取得して価値を高めてから市場に送り出し、高いリターンを得るために、フェーズⅡaまで臨床開発を実施して導出する戦略としています。なぜなら、フェーズⅡaまで臨床開発が進めば、ヒトでの試験によって安全性や有効性が確認されているため、製薬企業にとっても導入リスクが小さくなり、同時に、当社にとっても、コスト負担を抑えながらバリューアップできるというメリットがあるからです。

当社は、澤研究開発本部長のもと、探索から前臨床までは、さまざまなバックグラウンドをもつ少数精鋭のチームで創薬研究を行う体制が整っていますが、臨床開発の経験がある人員は十分ではありませんでした。そのような中、昨年、製薬企業でがん領域の臨床開発を行ってきた人材を臨床開発部長に迎え、2018年7月に「臨床開発部」を開設。2019年2月1日には米国・サウスサンフランシスコにもオフィスを構え、自社で臨床試験を行える体制を着々と整えています。欧州でも、これまで築いてきた人的ネットワークを生かして臨床開発を進めていく予定です。

新体制で臨床開発を進めるのは、4ページで紹介する2つの

ビジネスモデル 創薬における当社と製薬企業との関係

創薬のプロセスには多くの段階(フェーズ)がありますが、当社が手がけるのはコスト負担の少ない「フェーズⅡａ」までの段階。そこで開発した新薬候補化合物を製薬企業に導出することで「契約一時金」、各研究・開発段階での「マイルストーン収入」、新薬上市後の「ロイヤリティ収入」を得ていく収益モデル。米国FDAにブレークスルーセラピーとして認定された場合、開発期間は短縮可能。



BTK阻害剤です。2019年～2020年にかけ、着実にステップを進めていく予定ですので、これからの飛躍に期待してほしいと思います。

Q2 創薬研究の進捗状況は?

シエラ社に導出したSRA141をはじめ、ブロックバスター候補の研究を進めています

2016年にシエラ・オンコロジー社に導出したCDC7阻害剤AS-141（シエラ社の開発コード：SRA141）は、同社によって2018年第3四半期中に、米国でのIND申請（新薬臨床試験開始届）が完了し、大腸がんを対象とした臨床試験開始の準備が進められています。フェーズIで最初の治験患者にSRA141が投与されたときに、当社はマイルストーン収入として400万ドルを受領することになっており、これは2019年度に獲得できるものと考えています。この臨床試験が開始された場合、SRA141は、当社において初めての臨床試験段階の医薬品候補化合物となり、創薬事業は新たな段階に入ることになります。

そのほかにも、がん免疫や免疫炎症疾患をターゲットとしたブロックバスター候補の研究を進めています。

現在、世界ではオプジーボやキイトルーダなどの免疫チェックポイント阻害剤とキナーゼ阻害剤との併用療法による治験が活発に行われています。当社の創薬パイプラインにも、併用によって治療効果を上げる可能性を秘めた化合物がいくつもあります。がんの治療として当社が目指しているのは“がんを風邪のように薬を飲めば治る病気”にすること。キナーゼ阻害剤は低分子化合物ですから経口投与できますし、量産もしやすい。つまり、通院負担も軽く自宅で比較的安価に服用できるのです。こうした画期的新薬の創出を目指しています。

創薬事業の研究開発テーマと進捗状況

化合物	標的	対象疾患	開発フェーズ					
			Discovery	Preclinical	Ph Ⅰ	Ph Ⅱ	Ph Ⅲ	パートナー/共同研究先
SRA141（AS-141）	CDC7/ASK	がん		IND申請完了				Sierra Oncology
AS-0871	BTK	免疫炎症疾患						
AS-1763	BTK	血液がん がん免疫						
低分子化合物	Wnt-signal	がん がん免疫						国立がん研究センター
低分子化合物	キナーゼ	精神神経疾患						大日本住友製薬
低分子化合物	TGFβ signaling	血液がん がん免疫						広島大学
低分子化合物	キナーゼ	免疫炎症疾患						
低分子化合物	N/A	マラリア						北里大学
低分子化合物	DGK	がん免疫						
低分子化合物	非開示	がん						国立がん研究センター

AS-0871、AS-1763は早期の臨床試験許可申請を目指して研究開発を進めています

創薬パイプラインの中で開発が進んでいるのは、2つのBTK阻害剤です。いずれも前臨床試験段階で、欧米での治験申請に向けた研究開発を積極的に進めています。

そのひとつ、AS-0871は自社化合物ライブラリーから独自のアッセイ系を用いて創製したBTK阻害剤です。キナーゼ選択性が高いことから、リウマチなどの免疫炎症疾患の治療薬として研究開発を進めており、2019年中に欧州でCTA申請※し、臨床試験を開始することを目指しています。

もう一方のAS-1763は、BTK阻害剤イブルチニブ耐性の血液がんを治療標的とする次世代BTK阻害剤です。イブルチニブはよく効く薬ですが、一部の患者で耐性ができてしまうという課題があり、当社のAS-1763のように耐性ができてしまった患者さんにも有効なBTK阻害剤の実用化が強く望まれています。こちらは、独エボテック社のINDiGOプログラムを活用して、2019年中に米国におけるIND申請※に向けて前臨床試験を進めています。

※CTA申請：（Clinical Trial Application）臨床試験許認可
※IND申請：（Investigational New Drug Application）新薬臨床試験開始届

SRA141：がん
- 低分子CDC7阻害剤
- シエラ・オンコロジー社に導出済み
- シエラ社は大腸がん患者を対象としたフェーズ1/2試験を準備中
- マイルストーン総額　最大270百万ドル

AS-0871：自己免疫疾患
- 低分子BTK阻害剤　●非共有結合型
- 高いキナーゼ選択性

- 関節炎モデルで高い治療効果
- 全身性エリテマトーデスモデルで効果
- 2019年のCTA申請に向けて、前臨床試験を実施中

AS-1763：血液がん
- 低分子BTK阻害剤　●非共有結合型　●高いキナーゼ選択性
- イブルチニブ耐性BTK（C481S変異体）にも強い阻害活性を示す

- リンパ腫モデルで強力な抗腫瘍効果
- 2019年のIND申請に向けて、前臨床試験を実施中
- 自己免疫疾患にも適用拡大可能

Q3 創薬支援事業の成長戦略は?

顧客ニーズにあった品質とラインアップ、そして地道な営業力でシェア拡大を目指しています

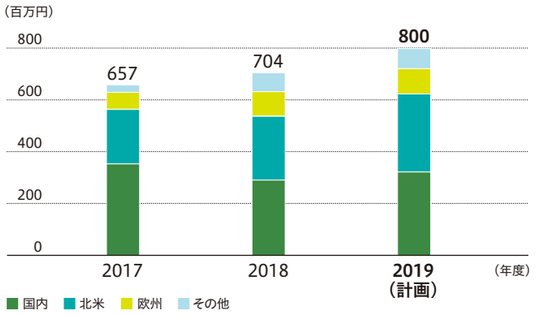
創薬支援事業は、キナーゼ阻害剤の創薬研究を行う国内外の製薬企業に、研究に必要な製品やサービスを提供する事業です。高品質の「キナーゼタンパク質」の販売や化合物の働きを分析・評価する方法(アッセイ系)の提供、その分析・評価を当社で実施するプロファイリング・スクリーニングサービスなどで収益を上げています。この収益をもとに、当社での創薬研究を進めていますが、ここで販売するものは創薬研究の中から生み出された技術やノウハウによるもの。創薬研究の中から出てきたものが支援事業となりお金を生むサイクルとなっています。

国内でキナーゼ創薬を行っている企業のほとんどに当社のキナーゼをご利用いただいている状況ではありますが、さらなる売上拡大には、潜在的需要をくみ取る必要があると考えています。また米国や欧州、中国市場に向けては、子会社や代理店を通じての地道な訪問が奏功し、キナーゼタンパク質製品等の売上が増加したことで今期は業績を伸ばすことができました。

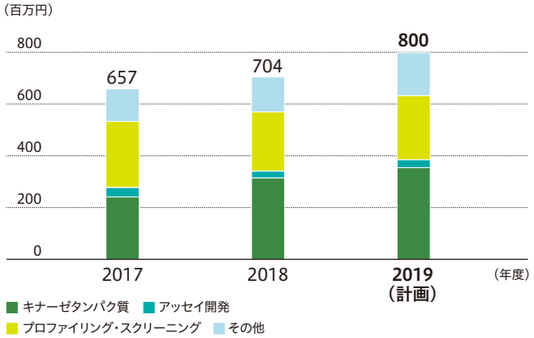
いずれにしても、製薬企業が必要とするような製品・サービスを提供するためには、サイエンスのレベルを保つ必要があります。いままでできなかったものができるなどの新しい技術を生み出すためにも、アカデミアとのネットワークを大切にしています。

海外売上をこれまで以上に伸ばすためには、免疫炎症や中枢神経系などのがんの研究グループ以外との取引が重要です。顧客ニーズに則した製品・サービスを提供することで売上の拡大を図っていきます。

創薬支援事業売上計画(地域別)



創薬支援事業売上計画(製品別)



Q4 今後強化が必要な分野は?

社内で行うものと外部パートナーを活用するものとを適切にコントロールしていきます

当社の強みは、キナーゼ創薬に関する豊富な知見・技術やそれをベースとした豊富な創薬パイプラインの保有、アカデミアや企業との人脈・ネットワークにあると思います。また強化が必要な部分としては、人的リソースや臨床開発体制だと考えています。

臨床開発については、すでに専門部署と米国拠点を新設し、体制を強化しました。また、現在、外部機関に外注している一部の試験についても、重要な部分は社内で行えるよう、研究者の人数ももう少し増やし、研究開発のスピードアップも図っていきたいと考えています。

同時に、がんやがん免疫領域において、アカデミアや企業との連携も強化していきます。連携することで、画期的なアイデアや技術、人的リソースを補うことができるからです。広島大学とは白血病幹細胞を標的とした白血病の完治療法や、新しいがん免疫療法の確立を目的として、早期のステージアップを目指して共同研究を継続しています。注力領域ではありませんが、北里大学北里生命科学研究所とキナーゼをターゲットとしたマラリア治療薬の研究も進めています。マラリアは発展途上国で多くの方が命を落とす感染症です。社会貢献の観点から、日本発の抗マラリア薬を目指して共同研究を継続していきます。

Q5 当期（2018年12月期）の総括は?

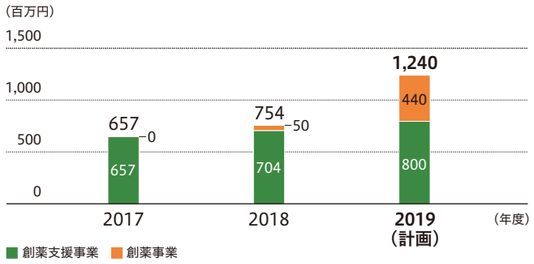
創薬ベンチャーとしてのステージアップを目指します

2018年2月に2020年12月期を最終年度とする3カ年の中期経営計画を策定し、創薬事業の着実な進展と創薬支援事業における安定的な収益の確保を基本方針として掲げ、事業を推進しました。

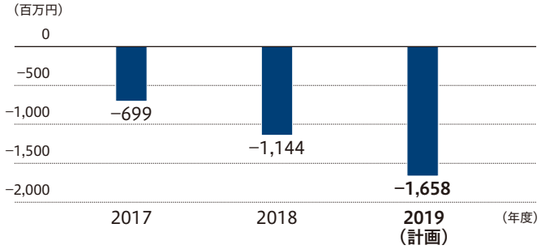
創薬事業の売上高では、第1四半期において、大日本住友製薬と精神神経疾患領域の革新的なキナーゼ阻害剤の共同研究契約を締結し、契約一時金を売上高に計上しました。また、ブロックバスターの可能性がある2つのBTK阻害剤プログラムについては、早期の臨床試験開始に向けて積極的に先行投資を行い、前臨床試験を実施してまいりました。その他の創薬プログラムについても、早期のステージアップを目指して、研究開発に注力してまいりました。さらに、自社臨床試験の実施に向けて、昨年7月には研究開発本部に臨床開発部を新設し、開発体制の基盤整備に取り組みました。以上により創薬事業における売上高は50百万円（前期は売上計上なし）、営業損失は1,261百万円（前期は841百万円）となりました。

創薬支援事業の2018年度の売上高は、704百万円で前期比7.2%増となりました。これは米国、欧州、中国など海外売上が大きく伸びたことが貢献しています。営業利益はキナーゼ関連の新製品・サービスの開発に取り組んだことから、前期比17.7%減の117百万円となりました。

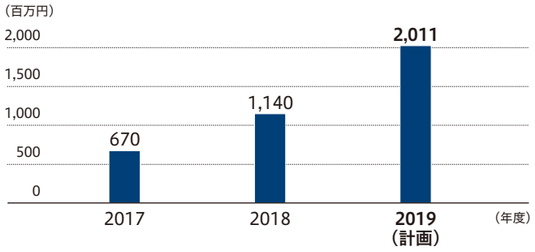
連結売上高計画



連結営業損益計画



研究開発費計画（全社）



以上の結果、当期の売上高は754百万円（前期比14.8%増）となりました。地域別の売上では、国内売上高は338百万円（前期比3.9%減）、海外売上高は416百万円（前期比36.4%増）となりました。損益面につきましては、営業損失が1,144百万円（前期は699百万円）、経常損失は1,159百万円（前期は711百万円）、親会社株主に帰属する当期純損失は1,210百万円（前期は737百万円）となりました。

Q6 創薬事業の業績と計画は?

マイルストーン収入を獲得予定です

引き続き、アンメット・メディカル・ニーズの高い疾患を中心に、特にがん、免疫炎症疾患を重点領域とした画期的な新薬の開発を目指して創薬研究を進めていきます。有望テーマへ研究リソースを重点的に投入し、創薬の成功確率の向上と研究期間の短縮に努めていきます。

2019年度には、シエラ社に導出したSRA141の臨床開発フェーズI試験が開始され、マイルストーン収入として400万ドルを獲得できるものと考えています。

また、現在前臨床試験を実施している2つのBTK阻害剤プログラムについては着実に進展させ、その後の自社臨床試験開始に向けて、研究開発に大きく先行投資を行っていく計画としています。

こうした取り組みを通じて2019年12月期における創薬事業の売上高予想を440百万円、営業損失1,802百万円を予定しています。複数の臨床試験段階のパイプラインを有する創薬ベンチャーとなれるように努め、当社の企業価値を高めてきたいと考えています。

Q7 創薬支援事業の業績と計画は?

既存顧客の深耕や新規顧客の開拓を戦略的に行います

創薬研究者をターゲットとした当社の製品・サービスは、品質の高さと営業力強化によって、北米と欧州、アジア地域において売上が大きく拡大しました。特に中国の創薬関連のビジネス分野の伸張は目覚しく、中国での売上が急拡大しました。国内では前年比で売上が減少しましたが、既存顧客の深耕や新規顧客の開拓を戦略的に行い、顧客の特注案件に柔軟に対応する体制を構築することで売上の拡大を目指します。また、昨年は当社のオンリーワン製品であるビオチン化タンパク質の製品ラインアップを拡充したり、Promega社のNanoBRET™技術を用いたセルベースアッセイサービスを新たに開始しましたので、これらの顧客への訴求を図り、売上の拡大を目指します。

以上の取り組みをとおして、2019年12月期における創薬支援事業の売上高予想を前期実績比13.5%増の800百万円、営業利益を22.9%増の144百万円といたします。なお、創薬支援事業における研究開発費は、新規製品・サービス

の開発及び既存製品・サービスの品質向上を目的として、48百万円を計画しています。

Q8 今後の成長イメージは?

創薬ベンチャーとしての中長期の成長に期待いただきたい

当社は、2003年に日本オルガノン株式会社からスピンオフし、キナーゼに関する創薬基盤技術をコアに創薬ベンチャーとしてスタートしました。まずは創薬支援事業で着実に売上を伸ばし、2008年から本格的に創薬研究を開始しました。

医療の現場で求められているのは、やはり飲んでよく効く薬です。在宅で、ある期間飲めば病気が治る薬は、医師や患者さんからの一番の要望でもあります。キナーゼ阻害剤はその条件を満たす新薬として、多くの製薬企業で活発に研究開発が行われており、今後ますます可能性が広がっていくと思っています。

また、人材面では、国際的な学術雑誌への論文の投稿、学位の取得、海外で行われる学会への派遣など、研究員がサイエンスのレベルを向上させていけるよう積極的に後押ししています。さらに、優秀な人材がより活躍できる環境を整えるために、社員の声に耳を傾けてきました。これまで、フレックスタイム制や産休・育休、短時間勤務、介護休暇などを導入してきました。それらは、国からの要請に対応したものではなく、当社独自に多様な働き方ができる仕組みを取り入れてきたものです。

そして2019年。当社はついに大きな飛躍期に入ります。まずは、臨床ステージの会社になり、複数のパイプラインが続々とステージアップすることを期待しています。

株主の皆様へのメッセージ

長期的視点で、画期的新薬の誕生を見守ってほしい

バイオベンチャーというビジネスモデルは、先行投資型で当面の間は研究開発費がかさむため、株主の皆様は満足できないこともあるかもしれません。しかし、会社のバリューはパイプラインの成長とともに着実にあがっています。米国のバイオベンチャーは、臨床試験にパイプラインが上がると100億円～1,000億の間で時価総額がつき、ひとつでも上市されると、4,000億～6,000億円にも跳ね上がってきました。ついに当社もそのステージに足を踏み入れようとしています。当社が生み出した新薬が上市するのはまだ少し先になりますが、安定的に利益を出せるまでに時間のかかるビジネスを中長期スタンスで見守っていただきたく思います。

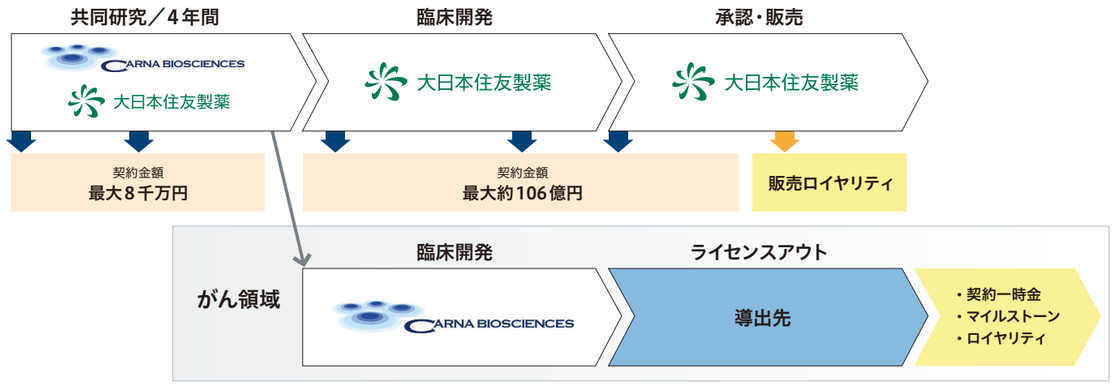
ノーベル賞を受賞した本庶先生もおっしゃっていましたが創薬の本質は、患者さんを苦痛から解放し、あるいは命を長らえるようにすること。患者さんやそのご家族に喜んでもらえるような新薬を作り出すことです。その日を夢見て社員たちは今日も研究開発に勤しんでいます。皆様にその夢を見届けてほしいと願っています。

その日もそう遠くはないと、確信しています。

大日本住友製薬との創薬共同研究契約

2018年3月、キナーゼ阻害剤創製のノウハウを持つ当社と、精神神経領域の創薬研究のノウハウを持つ大日本住友製薬が連携。革新的な治療薬の創製を目指す創薬共同研究契約を締結しました。

契約内容	共同研究(新規キナーゼ阻害剤の創製) 大日本住友製薬による開発および事業化
疾患領域	精神神経疾患を中心としたアンメット・メディカル・ニーズが高い疾患領域(がん領域は当社が権利を有する)
契約金額	契約一時金、開発及び販売マイルストーンとして最大約106億円を当社が受領
ロイヤリティ	年間正味売上高の一定の割合



創薬

医薬品候補化合物が生み出される現場

創薬ラボ

キナーゼ阻害剤等の研究開発を行うラボです。

細胞などを使って医薬品候補化合物の評価をしています

医薬品候補化合物の合成を行っています

化合物の分子量や純度を測っています

遺伝子発現解析を行なっています。

＊本図は模式図であり、実際のラボの配置図とは異なります。

創薬支援

製品サービスが生み出される現場

受託試験ラボ

顧客の化合物を預かるプロファイリング/スクリーニングは独立したラボで試験を実施しています。

セルベースアッセイ試験

キナーゼタンパク質の精製

製品保管庫

製造したキナーゼタンパク質を–150℃で保管

キナーゼタンパク質の培養

創薬支援ラボ

キナーゼタンパク質の製造を行うラボです。

連結財務諸表

連結貸借対照表

（単位：千円）

科　目	前連結会計年度 2017年12月31日現在	当連結会計年度 2018年12月31日現在
（資産の部）		
流動資産	2,134,250	1,671,589
固定資産	56,136	98,501
有形固定資産	20,381	18,729
無形固定資産	405	183
投資その他の資産	35,349	79,587
資産合計	2,190,386	1,770,090
（負債の部）		
流動負債	341,966	400,139
固定負債	470,511	482,497
負債合計	812,477	882,636
（純資産の部）		
株主資本	1,364,003	883,563
資本金	3,226,487	3,591,568
資本剰余金	2,044,512	2,409,593
利益剰余金	△3,906,897	△5,117,482
自己株式	△99	△117
その他の包括利益累計額	△1,186	△3,326
純資産合計	1,377,908	887,453
負債純資産合計	2,190,386	1,770,090

連結損益計算書

（単位：千円）

科　目	前連結会計年度 2017年1月1日から 2017年12月31日まで	当連結会計年度 2018年1月1日から 2018年12月31日まで
売上高	657,516	754,691
売上総利益	435,013	503,992
営業損失(△)	△699,060	△1,144,519
経常損失(△)	△711,496	△1,159,223
税金等調整前当期純損失(△)	△733,380	△1,206,799
親会社株主に帰属する当期純損失(△)	△737,264	△1,210,573

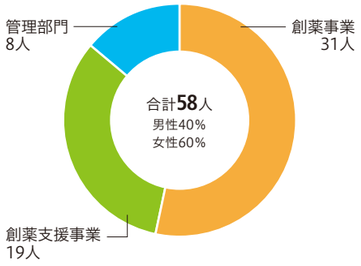
連結キャッシュ・フロー計算書

（単位：千円）

科　目	前連結会計年度 2017年1月1日から 2017年12月31日まで	当連結会計年度 2018年1月1日から 2018年12月31日まで
営業活動によるキャッシュ・フロー	△561,055	△1,128,026
投資活動によるキャッシュ・フロー	△38,131	△58,314
財務活動によるキャッシュ・フロー	295,814	687,522
現金及び現金同等物に係る換算差額	△1,595	△2,144
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△304,967	△500,964
現金及び現金同等物の期首残高	2,161,186	1,856,218
現金及び現金同等物の期末残高	1,856,218	1,355,254

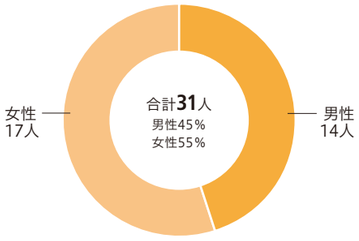
従業員構成

（単体：2018年12月末時点）



創薬事業従業員

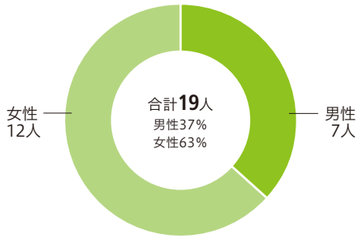
（単体：2018年12月末時点）



うち博士号取得者 13人

創薬支援事業従業員

（単体：2018年12月末時点）



うち博士号取得者 2人

株式の状況／株主メモ（2018年12月31日現在）

株式の状況

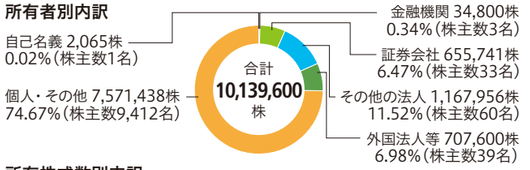
発行可能株式総数	30,000,000株
発行済株式の総数	10,139,600株
株主数	9,548名

大株主

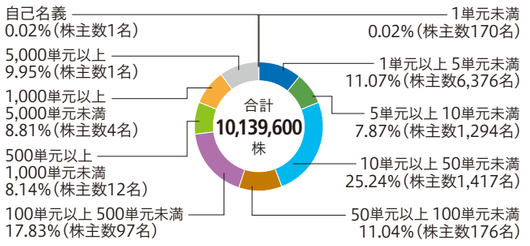
株主名	持株数(株)	持株比率(%)
小野薬品工業株式会社	1,009,000	9.95
吉野 公一郎	274,900	2.71
株式会社SBI証券	263,900	2.60
CREDIT SUISSE SECURITIES(EUROPE) LIMITED PB OMNIBUS CLIENT ACCOUT	250,100	2.46
村山 俊彦	104,500	1.03
カルナバイオサイエンス役員持株会	99,400	0.98
松井証券株式会社	91,000	0.89
J.P. MORGAN SECURITIES PLC	85,000	0.83
楽天証券株式会社	73,600	0.72
相川 法男	73,300	0.72

株式・株主分布

所有者別内訳



所有株式数別内訳



株主メモ

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月開催
基準日	12月31日
上場証券取引所	東京証券取引所 JASDAQ(グロース)
証券コード	4572
株式の売買単位	100株
公告方法	電子公告により、当社ホームページに掲載します。 https://www.carnabio.com/japanese/ir/notification.html ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載します。
株主名簿管理人および特別口座の口座管理機関	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
株主名簿管理人 事務取扱場所	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
（郵便物送付先）	〒168-0063 東京都杉並区和泉二丁目8番4号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
（電話照会先）	0120-782-031
（インターネット／ホームページURL）	http://www.smtb.jp/personal/agency/index.html

■ 特別口座について

株券電子化前に「ほふり」(株式会社証券保管振替機構)を利用されていなかった株主様には、株主名簿管理人である上記の三井住友信託銀行株式会社に口座(特別口座といいます。)を開設しております。特別口座についてのご照会及び住所変更等のお届出は、上記の電話照会先にお願いいたします。

カルナ<CARNA>の由来

当社の社名である「カルナ(Carna)」はローマ神話の「人間の健康を守る女神」です。また「身体の諸器官を働かせる女神」などとも言われています。

当社は生命科学「バイオサイエンス(Bioscience)」を探究することで「人々の生命を守り、健康に貢献することを目指す」ことを基本理念としています。

当社はまさに「カルナ(Carna)」でありたいと願っています。

ホームページのご案内

当社の企業情報やIR情報を掲載しています。
お問い合わせ等は「IRお問い合わせ」ページからお受けしています。

トップページ

IR情報ページ

最新のIRニュース、IR情報をメールでお知らせするサービスです。

当社の調査レポートを掲載しています。事業内容や業績、今後の計画等をご覧いただけます。

見通しに関する注意事項

当報告書の記載内容のうち、歴史的事実でないものは将来に関する見通し及び計画に基づいた将来予測です。
これらの将来予測には、リスクや不確定な要素などの要因が含まれており、実際の成果や業績などは記載の見通しとは異なる場合がございます。

会社概要(2018年12月31日現在)

商号	カルナバイオサイエンス株式会社
設立	2003年4月10日
資本金	35億9,156万円
事業内容	創薬事業:キナーゼ阻害薬等の研究開発(自社研究及び共同研究)並びに製薬企業等への導出活動 創薬支援事業:キナーゼタンパク質の製造・販売、アッセイ開発、プロファイリング及びスクリーニング・サービス、セルベースアッセイサービス等の提供
従業員数	58名
所在地	神戸市中央区港島南町1丁目5番5号 BMA 3F
上場市場	東京証券取引所JASDAQグロース(証券コード4572)

役員(2019年3月26日現在)

代表取締役社長	吉野 公一郎	社外取締役	髙柳 輝夫
取締役	相川 法男	社外監査役(常勤)	有田 篤雄
取締役	澤 匡明	社外監査役	小笠原 嗣朗
取締役	山本 詠美	社外監査役	松井 隆雄

海外子会社(2019年3月26日現在)

商号	CarnaBio USA, Inc.
代表者	山本 詠美
所在地	米国マサチューセッツ州、ネイティック(ボストン市近郊)
主な業務内容	北米における創薬支援事業(キナーゼ創薬研究等に関する製品・サービスの販売・提供)及び創薬事業(キナーゼ阻害薬等の臨床開発)
資本金	1,400千米ドル
従業員数	4名

カルナバイオサイエンス株式会社

〒650-0047
神戸市中央区港島南町1丁目5番5号 BMA 3F
TEL 078-302-7039(代表)　FAX 078-302-6665
URL https://www.carnabio.com

UD FONT
ユニバーサルデザイン(UD)の考えに基づいた見やすいデザインの文字を採用しています。

VEGETABLE OIL INK
この報告書は環境にやさしいベジタブルインキを使用しています。